

論文番号 35

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Alcohol Consumption and Risk of Intermittent Claudication in the Framingham Heart Study

フラミンガム研究でのアルコール消費と間欠性跛行との関連

執筆者

Luc Djoussé et al.

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Circulation.2000; 102:3092-3097

キーワード

alcohol, smoking, peripheral vascular disease

要旨

(背景) 間欠性跛行は、末梢動脈性疾患の代表的なものであり、心筋梗塞や脳卒中の予見因子である。そして間欠性跛行は循環器疾患の発症率や死亡率増加と関連があるとされており、心疾患の発症率や死亡率を2倍～4倍リスクを増大させるとされている。今までの研究では、タバコや糖尿病、高齢、高血圧が間欠性跛行のリスクファクターとされている。しかし飲酒量と間欠性跛行のリスクとの関連は未だ議論のあるところである。この研究の目的は、フラミンガム・スタディーの対象者において飲酒の量、種類と間欠性跛行発生の関連を評価することである。

(方法) 1948年にフラミンガムで始まった前向き追跡研究である Framingham Heart Study の対象者がこの研究の対象者である。Framingham Heart Study の最初からの対象者は28歳から62歳の5,209名であり、1971年にはその子供の世代である5,124名が更にこのコホートに加わった。飲酒量は一日あたり消費量0g、1～6g、7～12g、13～24g、24g以上の5群に分類した。

(結果) ベースライン時に間欠性跛行の症状がなかった18,339名のうち、男性は8,012名、女性は10,327名であり、各々の年齢(±標準偏差)は49.0(±13.5)、51.2(±14.5)であった。6.8年の追跡期間に、414人の対象者が、間欠性跛行を発症した。飲酒量の最低の群から最高の群の5群において、年齢調整した上での間欠性跛行の発症率は、1,000人年あたり、男性で5.3、4.1、4.2、3.2、4.6であった。女性では、3.4、2.5、1.5、1.9、2.5であった。多変量Cox回帰モデルでは、逆相関の関係を示した。非飲酒者に対して男性では飲酒量13～24g/dの群、女性では7～12g/dの群が間欠性跛行のリスクが最も小さかった。その際のハザード比は男女各々0.67(95%CI:0.42～0.99)、0.44(0.23～0.80)であった。この飲酒の予防的な効果は、ワインとビールによって最も強く観察された。

(結論) このデータは、適量飲酒が間欠性跛行に対して予防的な効果があることを首尾一貫して示しており、男性では13～24g/d(1～2drinks/d)の飲酒量、女性では7～12g/d(0.5～1drinks/d)の飲酒量が、最も間欠性跛行に対して低いリスクである。